関連国際学会の報告

第61回アメリカ口腔内科学会 (AAOM)

藤 林 孝 司

61st Annual Meeting of the American Academy of Oral Medicine

Takashi FUJIBAYASHI

第61回アメリカ口腔内科学会 (American Academy of Oral Medicine: AAOM) が2007年4月18日 (水) から4月21日 (土) の4日間にわたってカリフォルニア州のサン・ディエゴにて行われた。筆者は昨年に続いてこの学会に参加したのでその様子を報告する。昨年はプエルトリコで第60回記念大会がWWOM (第5回 World Workshop on Oral Medicine) と共催で行なわれたが今年はAAOMの単独開催であった。今年の学会のテーマは診断と予防：新概念の登場と名付けるもので心疾患患者歯科口腔疾患治療における合併感染症予防のための抗菌剤使用、口腔癌の早期発見と新しい診断技術などが大きな話題となっていた。会長はミネソタ大学 Oral Medicine 教授の Dr. Nelson Rhodes, 学術プログラム委員長はニューヨーク大学の Dr. Ross Kerr で、参加者は例年とほぼ同じく250名ぐらいであった。会場は San Diego の太平洋岸の Mission Bay にある有名な Sea World に近い Hyatt Regency Islandia Hotel and Resort で、ocean beach には接していないがヨットハーバーに面した美しいところであった (写真1, 2)。

学術プログラムは18日 (水) 午後2時の Abstracts Program から始まり、1題10分のいわゆる一般講演が合計16題途中30分の coffee break をはさんで17:20まで行なわれた。講演内容は色々なものがあつたが、筆者が興味があつたのはテキサス大からのウガンダの子供の HIV 感染者における唾液中の IL-2, IL-6, IL-10, TNF- α , GM-CSF, RANTES, MCP-1 などのサイトカインの測定、イスラエルからの110例の Actinomyces 菌関連病変の解析、ブラジルからの再発性アフタ非定型例と尋常性天疱瘡との蛍光抗体直接法での鑑別、日本の北大からの術前口腔癌患者の疼痛が多変量解析で内向発育型に有意に高値とする

報告、南カリフォルニア大からの Brush biopsy 標本での Ploidy パターンの解析、ワシントン大からの再発性アフタのハーブ由来の licorice という抗炎症剤入り口内錠の治療効果などであった。Coffee break および講演終了後には講演会場すぐ隣のポスター会場 (写真3) でポスター討論が行われた。ポスター発表は39題で日本からは東京歯科大、自治医大から計3題の発表があつた。その後6:30pm から中庭で2時間程度 welcome reception が行なわれ、飲み物と軽食をしつつ旧交の知人と久しぶりの会話を楽しむことができた。

学会2日目の19日 (木) は8:00am より行なわれ、Antibiotic Prophylaxis と題するテーマで4名の演者による講演が行われた。1回の各演者の講演時間は20-30分程度で coffee break をはさんで午前中に2セッションがあり、午後2:00からも同一テーマで最終セッションが行われた。4人の演者はいずれも American Heart Association (AHA) の Rheumatic Fever, Endocarditis and Kawasaki Disease Committee の報告書作成委員会のメンバーで、菌性感染に詳しいノースカロライナ Carolinas Medical Center, Oral Medicine 教授の Dr. Peter Lockhart, UCSF の心臓内科医の Dr. Ann Bolger, Mayo Clinic の感染症の専門家 Dr. Larry Baddour, AHA の科学者で Infective Endocarditis Antibiotic Prophylaxis Guideline の作成責任者 Dr. Kathryn Taubert であつた。午前中のセッションでは拔牙を含む一般の歯科治療と菌血症、歯科治療による心疾患患者での合併感染症発生の関係、インドとミネソタでの prospective study の結果比較など種々のデータに基づく研究結果が発表とともに議論がなされた。注目すべきこととしては歯科処置に続発する菌血症よりも食べ物の咀嚼や歯磨きのような普通日常生活の活動によって発生する特別の理由のない菌血症の方が感染性心内膜炎を惹起する可能性ははるかに高いことが示された。

そして午後の最終セッションでは AHA が4月19日の午後1時に発表した Infective Endocarditis Antibiotic

写真 1 第61回 AAOMの学会が行われた San Diego にある Hyatt Regency Islandia Hotel and Resort

写真 2 学会場ホテルの Marina

写真 3 ポスター会場

写真 4 2日目午前中の Antibiotic Prophylaxis のセッション

Prophylaxis Guideline の改訂版が公表され、歯科処置のための抗生物質予防投与に関する勧告について説明と討論が行われた。このガイドラインの改訂は AHA のみでなく米国歯科医師会、米国感染症学会、米国小児科学会も参加の上で行なわれたもので、勧告の内容は前回の 1997 年の勧告を 10 年ぶりで大きく改訂するものであった。それによると心疾患患者に対する歯科処置のための抗生物質の従来の予防投与は感染性心内膜炎の多くの症例を予防する可能性は低く、いわばその無用な投与は抗生剤に対するアレルギーの発生や耐性菌の誘導等の副作用も懸念されることから、その予防投与は感染性心内膜炎の生涯にわたる発症リスクに対して行なわれるべきではなく、その対象は歯肉組織または歯根尖周囲組織に及ぶ歯科的操作または口腔粘膜の穿孔を伴う処置をハイリスク患者に行なう場合にのみ

抗生物質予防投与が推奨されるとするものである。そしてこの場合のハイリスク患者とは従来なら予防投与されていた僧帽弁疾患、大動脈疾患、リウマチ性心疾患、心室中核欠損、心房中隔欠損、肥大型心筋症などの構造的異常を持つ患者では対象とされず、適応となるのは感染性心内膜炎の既往、人工心臓弁、姑息的なシャントや導管を含む未処置のチアノーゼ性先天性心疾患、手術にしろカテーテル処置にしろ人工材料や人工装置によって完全に修復された先天性心疾患で処置後 6 ヶ月以内、先天性心疾患の治療後で人工パッチまたは人工装置の部位またはその近くに異常が残存する場合、心臓移植で心臓弁に問題を発現する場合などとされている。会場の参加者はこの問題には日常関係する人が多いと思われ聴衆も熱心であった（写真 4）。AHA の改訂勧告公表と同じ日に合わせてそれを引き受ける形で

AAOMでも直ちにこれを歯科医向けに発表するプログラムが組んであったのは、この問題に対する歯科医の関心の高さと、これに答えようとするAAOMの積極的な姿勢を示しているように思われる。この改訂は今後日本にも影響を与えるものと考えられる。この勧告に興味のある方はすでにAHAのホームページに掲載されているのでご覧ください (<http://www.americanheart.org>)。

話しは少し前後するが2日目の午後12:30から13:00までLester Burket賞の受賞講演が行なわれた。この賞は毎年若手研究者の中から審査により研究内容が優秀なものが1題選出されるもので、今年は南カリフォルニア大のDr. Satish K.S. Kumarで、その内容はカリフォルニア州における口腔扁平上皮癌の発生頻度をCalifornia Cancer Registryの1988-2001のデータベースから解析したものでどの人種でも部位は舌癌がもっとも多く、人種では黒人で高く、白人はその次で、アジア人はヒスパニックとともに低位とのことであった。2日目の夕方にも中庭でCocktail Receptionが行なわれ、メキシコ音楽も披露された。

3日目の20日(金)は口腔癌の予防に関するテーマとなった。その意味は2007年1月American Cancer Societyは米国における癌による死亡率が急激に低下し、その効果は4大癌(肺癌、乳癌、前立腺癌、大腸癌)においても(女性の肺癌を除き)みられ、その理由は早期発見による効果が大きいが、口腔・咽頭癌についてはこのような低下が見られていないと報告している。AAOMではこれを受けてOral Cancer Early Detection & Preventionを2007年の活動目標としているものである。そこで8:00amからはワシントン大のDr. Mark Drangsholtが予防の科学と題して予防学とでも言うべき予防に関する一般科学的講演を、8:45amからはカリフォルニア大サンフランシスコ校(UCSF)のDr. Joel Paleskyがヒトパピローマウイルスワクチンに関する研究内容の講演を、10:15amからはUCSFのDr. Nita Chainaniが栄養と口腔癌予防と題する講演を行なった。口腔癌予防に一番関係する栄養素は野菜で癌発生のRelative Riskは0.50となり、果物もRR 0.51とこの2者がもっとも有効で、カロチン、ビタミンC,Eも有効、ビタミンAの効果は不明で過剰では逆効果とのことであった。11:00amからはUCSFのDr. Margaret Walshが口腔癌予防としての禁煙について脱煙治療をしている立場からOral Medicine専門医の役割を強調した講演があった。

12:00からはSamuel Charles Miller(AAOMの創設者で第1回大会の会長)記念賞の受賞講演でニューヨーク大のDr. Jonathan Shipが放射線治療による唾液腺障害の予防と題する講演を行なった。内容は唾液腺の放射線感受性、障害の発生シグナルと症状、Pilocarpin, Cevimeline, Stimulants(sugar-free gum, xylitol gum, sugar-free

mints), Saliva Substitute (Spray, Rinse), Fluorideによる治療、予防については3Dの照射計画、唾液腺除外照射、Amifostineによるcytoprotection、唾液腺の外科的移動法などであった。

2:00pmからはOral Cancer Early Detectionと題して4人の演者による早期発見に関するセッションが行なわれた。UCSFのDr. Caroline ShiboskiはHPVの面からの診断につて、NYUのDr. Ross Kerrは早期受診運動について、Dr. Michael Huberは口腔癌や前癌病変のScreeningのための最新技術たとえばViziLiteとよぶchemiluminescent lightによる観察、さらにそれにtoluidine blue染色を組み合わせたViziLite Plus TBlue630とよぶシステムによる観察、蛍光を用いたVELscopeという観察器具による方法などを紹介した。Dr. David Ledermanは口腔癌・前癌病変の診断についてcellular atypia, epithelial dysplasia, Ca-in-situ, invasive Caなどの組織診断、brush biopsy, scalpel biopsy, punch biopsyなどbiopsyの方法、toluidine blue染色などについてふれた。3日目の夕方7:30pmからはPresident Receptionに引き続いて8:00pmからは着席してAward Dinnerが開催され、新役員の紹介やSamuel Charles Miller記念賞やLester Burket賞の受賞式を行なわれた(写真5)。

学会4日目の21日(土)も8:00amよりNYUのDr. Ross Kerrの司会のもとにOral Cancer Detectionのセッションが行なわれた。はじめにジョンスホプキンス大のDr. Wayne KochがOral Cancer Detection: Research from Johns Hopkinsと題して自分たちがどのように早期発見をやっているか紹介した。ついでカナダのブリティッシュコロンビア州での歯科医院からがんセンターまで一体となった早期発見、早期受診の活動の紹介をBritish Columbia Cancer Agencyの3名の演者が行なった。これはBritish Columbia Oral Cancer Prevention Programと呼ぶもので、第1演者のDr. Mariam RosinはOral Dysplasia Program, Screening ProgramにしたがってHigh Risk ClinicsにてVELscopeなどのfluorescent visualization(FV)の器具とtoluidine blueとの併用での診査の方法を、第2演者のDr. Lewei ZhangはFVで蛍光を反射せず暗部となる部分(FV Loss)とその病理組織所見(mild, severe dysplasia)とはその相関がかなり高いと述べhigh grade dysplasiaがFV Lossではなく蛍光を示すfalse negative率は0.07%と極めて低いことを示した。第3演者のDr. Michele Williamsはこのようなvisualization deviceを用いた診査の取り組みがOral Cancer Detectionのevidence-based approachであることをprogram全体のしくみから説明した。10:15amからはUCLAのDental Research Institute, Division of Head & Neck Surgery/OtolaryngologyのDr. David WongがOral Cancer

写真 5 3日目夕方の Award Dinnerにおける Samuel Charles Miller 記念賞受賞者の Dr. Jonathan Ship の挨拶

写真 6 4日目の Oral Cancer Detection のセッション

& Salivary Diagnostics と題して口腔扁平上皮癌患者の唾液中 proteomics による診断の研究結果を Mac-2 Binding Protein (M2BP), MRP14, CD59, Profilin, Catalase などについて説明し, NIDCR の援助のもと多施設共同研究結果を Human Salivary Proteome Central Repository として公開していることを述べた。11:00am から 30 分の coffee break ののち 11:30am からカリフォルニア大 Dr. Petra Wilder-Smith が Visual Technologies for Oral Medicine と題して spectroscopy, autofluorescein imaging (VELscope), photosensitizer-induced fluorescence (Photofrin), in vivo optical coherence, in vivo microscopy の 5 種類の方法を述べた。12:15pm からイリノイ大の Dr. Joel Epstein が oral chemiluminescence & toluidine blue

と題して ViziLite Plus TBlue630 について述べた。最後に Oral Cancer Detection のテーマで以上の演者によるパネルディスカッションがあり会場からも熱心な討論があった(写真 6)。このように AAOM は会を挙げて口腔癌と前癌病変の早期発見の活動に使命感を持って真剣に取り組んでいることが実感され筆者は強い感銘を受けた。

来年の第 62 回 AAOM2008 はアリゾナ州 Scottsdale の PLAZA Resort Hotel で 4 月 29 日-5 月 4 日にジョージア医科大歯学部口腔診断学教授 Wayne W. Herman 会長のもとで行なわれ, 演題締め切りは例年 12 月中旬になっているので詳しくは AAOM のウェブサイトをご覧ください (<http://www.aaom.com>)。